

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 中島 卓裕

論 文 題 目

小中学生における自閉スペクトラム症特性と心理社会的適応の関連についての
検討—休み時間の遊び及び運動能力に注目して—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 永田 雅子

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 金子 一史

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 狐塚 貴博

論文審査の結果の要旨

本論文は、一般小中学生における自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; 以下 ASD とする) 特性と心理社会的不適応の関連について、関連が強いと考えられる運動能力及び学校での休み時間の過ごし方に焦点を当て検討をおこなったものである。本研究の特色は、大規模コホート研究の一環として行われたものであり、従来診断概念として捉えられてきた ASD を特性としてとらえ、地域の小中学校に通う児童生徒を対象としたものであること、これまであまり検討されてこなかった休み時間の過ごし方や運動能力を媒介要因としてモデルに含み、ASD 特性と心理社会的不適応の連続的な関連を定量化しようとした点である。

なお本論文の題目は、最初に提出された段階では「児童期における自閉スペクトラム症特性と心理社会的適応の関連についての検討—休み時間の遊び及び運動能力に注目して—」であったが、論文指導過程で、「小中学生における自閉スペクトラム症特性と心理社会的適応の関連についての検討—休み時間の遊び及び運動能力に注目して—」へと変更することとした。

本論文は 5 章から構成されており、第 1 章は、ASD の概念と、心理社会的不適応に関する要因、および遊びの発達の側面から先行研究を概観している。これまでは、診断を受けた ASD 児を対象とした研究が多く、本研究において、一般小中学生を対象とすることの意義について論じられるとともに、ASD 特性のある児童の遊びの発達に焦点をあて、休み時間や運動能力を、心理社会的適応に関連する要因として検討を行うことの重要性について述べられている。

第 2 章は、一般の小中学生を対象に、休み時間の過ごし方を媒介とした、ASD と心理社会的適応の関連について検討を行っている。小学校 4 年～中学生まで 5366 名のアンケート結果の分析が行われ、休み時間の過ごし方が友人関係の問題を統制してもなお、心理社会的適応に関連することを明らかにし、学校の場合での休み時間に対する介入の必要性について論じられている。

第 3 章では、第 2 章と同様に一般の小中学生を対象とした大規模調査が行われ、小学校 4 年～中学生まで 5084 名の調査結果が分析された。本研究により、ASD 特性が高いほど他の同年齢の子どもたちよりも運動能力が劣ることを明らかにするとともに、ASD 特性と友人関係問題の関連では運動能力を媒介した間接効果があったことが示された。体を動かすといった運動能力は、子どもたちが学校で友人と遊ぶという場面においても重要な役割を果たしていると考えられるが、性別及び学校段階によらず心理社会的不適応に対して運動能力が一定の寄与を果たしていることが示された。

論文審査の結果の要旨

第 4 章は、放課後等デイサービスを利用する ASD 特性をもつ児童生徒を対象とした介入プログラムの実践報告が行われている。遊びとかかわりの段階に応じたプログラムを開発し、放課後等デイサービスを利用している小中学生 11 名を対象にプログラムを実施その効果を検証したところ、介入前後で、自由遊び時間の遊びのレベルや友達との共有行動の広がりが観察された。これらの結果から ASD 特性の小中学生への遊びを通した支援の意義についてまとめられている。

第 5 章の総合考察では、特性は中核症状である社会的機能だけではなく、運動能力や休み時間の遊びを媒介として心理社会的不適応に大きく関連すること、ASD 特性の高い児童生徒に対して遊びの発達に関連して、運動能力や休み時間の過ごし方を学校の場合において支援することの重要性について考察が行われ、本論文が果たす意義および、今後の展望について論じられている。

本研究の特色は、従来診断概念として捉えられてきた ASD を、特性として扱い検討することで、これまでの診断を受けた臨床群を対象としたものではなく、一般の小中学生の児童生徒における傾向について明らかにすることを試みている点である。さらに、これまであまり検討されてこなかった休み時間の過ごし方や運動能力を媒介要因としてモデルに含み、ASD 特性と心理社会的不適応の連続的な関連を定量化しようとした点において、大きな意義があるといえる。

本論文に対して審査委員は慎重に審議を行い、内容に関して次のような指摘がなされた。(1)これまでの研究の大きな流れの中で、申請者自身がどういった理論的な立場や位置づけにあるのか。(2)本研究結果から学校現場にどういった還元を行うことができるのか。本研究で明らかになったことをより具体的に提示する必要があったのではないか。(3)第 4 章の効果検証におけるカテゴリーの分類方法の妥当性や評価者評定の一致のプロセスが明確ではない。本論文の中核となる“遊び”についてどうとらえるのかより丁寧に提示すべきだったのではないか。(4)友人関係の問題を共変量として扱うこと、その結果から得られたことが十分考察にいかせられていないのではないか。(5)総合考察では特性がスペクトラムであることを最初に提示しているが、本研究の結果からこの考察を導きだすことの限界をどう考えるのか。

学位申請者はこれらの問題点について十分に認識しており、審査委員からの指摘や質問に対しても、適切かつ誠実な対応が行われた。また今後、上記の点を踏まえてさらに ASD 児者に対する“遊び”を通した支援について強い意欲を示している。

別紙1-2

論文審査の結果の要旨

小中学校における支援は、学習支援やソーシャルスキルといったものに注目されがちであるが、休み時間に子どもたちがどう過ごすのかということを支援することに大きな意義があることを提示したこと、休み時間の過ごし方にもかかわる体を動かすといった運動能力が心理社会的適応にも影響を与えることを示したことは、ASD 特性をもつ子どもたちへの支援を考えるうえで非常にユニークな点に着目をした一連の研究であり、今後一層の発展が期待される。

よって 審査委員は全員一致して本論文を博士(心理学)の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。